

○研究あれこれ

小町・蟬丸・光孝天皇

中 川 みゆき

あちこちから、花便りが届く季節になりました。
花と言えば、
花の色はうつりにけりないたづらにわがみよにふるながめせしに

という小野小町の歌を思い出します。『百人一首』の中でも、最もよく知られた歌のひとつではないでしょうか。「六歌仙」の一人にも数えられる小町ですが、その生涯は幾重もの謎のベールに包まれ、小町の生誕や終焉の地と称される場所は全国各地にみられます。京都山科にある小野随心院もその旧跡と伝えられ、天明7（1787）年の『拾遺都名所図会』の境内図には、小町の艶顔を装ったという「小町化粧水」や、小町のもとに百夜通いをした深草少将が植えたという「栢大木」などが描かれています。絶世の美女として、あるいはまた高慢冷酷な女性として、栄耀を誇った小町の姿を彷彿させますが、小町にはもうひとつ、あまりにも哀れな末路をたどったという物語が残されています。

謡曲『関寺小町』もそのひとつです。七夕の夜、稚児を伴って山陰の庵に住む老女のもとに歌物語を聞きに行った関寺の僧は、言葉の端々からこの老女が小野小町の零落した姿であること知ります。小町は自らの歌を引いて、過ぎ去った昔の栄華を語り、今のみじめな我が身を嘆きます。この『関寺小町』の舞台になった関寺の寺名は、山城と近江を結ぶ逢坂関に隣接していたことから付けられたと伝えられています。

逢坂関と言えば、『百人一首』には、有名な蟬丸の歌があります。

これやこの行くも帰るもわかれては知るも知らぬも逢坂関

蟬丸も小町と同様に謎の歌人で、宇多天皇の皇子敦実親王に仕えた雑色とも、また、醍醐天皇の第四皇子とも言われ、逢坂山に庵を結んで隠棲生活を送ったと伝えられています。鴨長明は『無名抄』に「逢坂の関の明神と申すは昔の蟬丸なり、彼の藁屋の跡を失はずして、そこに神となりてすみ給ふなるべし」と記していますが、現在、逢坂峠の付近には蟬丸の名を持つ神社が三社あります。そのひとつ関蟬丸神社下社は関清水大明神蟬丸宮とも呼ばれ、社伝によれば、逢坂山の手向けの神、いわゆる道祖神として祀られ、後に「延喜第四子蟬丸之霊並姉宮逆髪之霊」も合祀されたことがうかがえます。この関清水大明

神蟬丸宮は、蟬丸が琵琶法師の祖とも言われることから音曲諸芸道の祖神としての信仰を集め、江戸時代には、説教者などに免状が出されていました。

音曲諸芸道の祖神と言えば、座頭の職能団体であった当道座が祖神としたのが「雨夜尊」でした。

「雨夜尊」をめぐるのは、いくつかの伝承が残されていますが、その代表的なものに光孝天皇の皇子とする説があります。『百人一首』の中で、これも有名な

君がため春の野に出て若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ

の歌を詠んだのが光孝天皇です。仁明天皇の第三皇子だった時康親王は、陽成天皇の後を受け、五十五歳で位につきました。ところで、この光孝天皇の次弟、すなわち仁明天皇の第四皇子人康親王を「雨夜尊」とする説も、近世中期以降の当道座に伝えられています。人康親王は山科宮とも呼ばれ、親王山荘跡などがある山科は、人康親王ゆかりの地でもあったのです。

小野小町はこの宮の死を悼み、

けさよりはかなしの宮の山風やまた逢坂もあらしとおもへば

という歌を詠んだと伝えられています。四宮と言えば、蟬丸も第四皇子でした。

山科そして逢坂山を舞台に語られた様々な伝説は、いつしか不思議な力に引き寄せられるかのように紡ぎ合わされ、私たちの前に何とも興味深い世界を残してくれたようです。花便りに誘われて、そんな伝説の世界の扉を開けてみたいと思う今日この頃です。

（同和問題関係史料センター研修員）